



さいたま市

# さいたま 来ぶらり通信



さいたま市図書館報

2016年3月15日発行

Contents

わがまち Sai 発見…………… 1,2

本棚ぶらり

大人も楽しめる絵本の世界…………… 3

さいたま市のご当地ソングいろいろ／美園図書館が開館しました…………… 4

わがまち

はっけん

Sai 発

第16回

現代短歌新人賞が決まりました

## 大西民子さん 現代短歌新人賞

氷川神社の程近く、氷川の杜文化館の庭内に、戦後を代表する歌人・大西民子さんおおにしだみこの歌碑があります。

かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待つ夜もなし今は

この歌は、大西さんの第一歌集『まぼろしの椅子』の代表歌で、家庭を裏切った夫を待ち続ける妻の哀切を歌い上げ、多くの読者の共感を得た歌です。

今回は、大西さんの足跡をたどりながら、さいたま市とのかかわりをご紹介します。

### 大西さんとさいたま市

大西民子さんは、大正13年（1924）、盛岡市に生まれました。昭和24年（1949）にさいたま市（旧大宮市）に移り住み、以後、平成6年（1994）に69歳で他界するまで、この地で活躍されました。

大西さんがさいたま市に転居するきっかけとなったのは、新歌人集団の存在でした。戦後間もない昭和21年、加藤克巳氏かとうかつみ、近藤芳美氏こんどうよしみ、大野誠夫氏おののびらの歌人が、新歌人集団を立ち上げ、浦和駅前にあった埼玉県商工経済会館で発会式を行いました。当時、三氏は、ともにさいたま市（加藤氏は旧与野市、近藤氏・大野氏は旧浦和市）在住でした。大西さんは、新聞や雑誌でこうした活動を知り、転居を決意したのです。

大西さんは、昭和31年（1956）、第一歌集『まぼろしの椅子』を刊行。以後、『不文の掟』、『無数の耳』、『花溢れみき』など、10冊の歌集を刊行しました。

これらの歌集は、高く評価され、「短歌研究賞」、



▲歌碑（氷川の杜文化館）  
表（上）と裏（右）

「遼空賞」ちようくう、「詩歌文学館賞」などの賞を受賞しています。

一方、私生活は幸福とは言い難く、昭和22年（1947）に結婚し、翌年には男児を授かるも死産、その後、半年余り病床に臥しています。また、昭和21年（1946）に父が病死、昭和35年（1960）に母も他界、昭和39年（1964）には10年間別居していた夫と協議離婚。同居していた最愛の妹も昭和47年（1972）に急逝し、48歳で身寄りのすべてを失うこととなります。

こうした家族の死、離婚は、大西さんの歌に大きな影響を与えます。作品の随所に、「死と向き合

う特異な感性」ともいふべき表現が見られ、やがてそれは、夢と幻想の世界、幽玄の世界へと昇華されていきます。

晩年の大西さんは、多くの新聞や雑誌の選者を務める傍ら、現代歌人協会理事、埼玉県歌人会副

会長などを歴任、平成4年（1992）11月には紫綬褒章を受章しています。

平成6年（1994）1月5日、自宅にて急逝。享年69歳。平成10年（1998）には遺歌集『光たばねて』が刊行されました。

## 大西さんと現代短歌新人賞



大西さんの遺稿、蔵書等約1万点と著作権が、平成8年（1996）、旧大宮市に寄贈されたことをきっかけに、(仮称)大宮文学館を整備する構想が浮上します。この構想は、その後消滅しますが、平成12年（2000）、旧大宮市が文学館の先行事業として「現代短歌新人賞」を創設。合併後も引き継がれ、平成28年（2016）には、第16回を開催するに至りました。

「現代短歌新人賞」は、歌壇に新風をもたらす歌人の発掘・支援を行うことを目的として、毎年、有識者へのアンケートで多くの推薦を受けた歌集、選考委員が推薦する歌集の中から、受賞作品を決定しています。

その表彰式では、毎回授賞とともに著名な歌人・詩人の方々に特別講演をお願いしています。昨年

の第15回では記念座談会「大西民子を語る」と題し、選考委員5名が大西さんの歌を読み解くとともに、逸話などを紹介されました。

相次ぐ不幸に屈することなく、それを文学に昇華させた大西さんの歌と生きざまは、没後20年以上たった今でも語り継がれ、さいたま市に息づいています。



▲大西民子さんイラスト  
(森田敏男/画)

※大西民子氏をはじめとするさいたま市ゆかりの文学者の資料を展示・紹介できるよう、大宮図書館で現在整理を進めています。

## 第16回 現代短歌新人賞受賞作が決まりました

さいたま市が主催する「現代短歌新人賞」は今年で16回目となります。平成27年12月6日の選考会で選ばれたのは、尾崎朗子さんの歌集『タイガーリリー』(ながらみ書房 2015)です。

「尾崎朗子歌集『タイガーリリー』には作者の生の重み、深みが感じられ、時にユーモアを感じさせる作もたんにユーモアに終わらず、切実な想いがその奥に隠されており、安定した表現も評価し、贈賞を決めたのである。」

(選考委員講評、さいたま市ホームページより)



作品や選考過程についての記事が、雑誌『ミセス』(文化出版局)2016年3月号に掲載されています。『ミセス』は図書館でも所蔵していますので、ぜひご覧ください。